

令和7年度 第59回 中学生の「税についての作文」

町田税務署長賞

『税金を通して見えた社会』

町田市立つくし野中学校 3学年 久保田 恵依

「また税金が上がるの？生活がきつくなるばかりだな……」夕食中、母がテレビを見ながらつぶやいた。父も「本当だよな。給料は変わらないのに」と言った。私はその会話を聞いて、「税金って、やっぱり嫌なものなんだな。」と思った。でも、どこかモヤモヤが残った。学校では、税金は社会を支える仕組みだと教わっていたからだ。

その後の社会の授業では、税金の使い道について、税理士の方々から学んだ。教育、医療、道路整備、災害対策など、生活にかかわるものだった。そのとき私は、どれもが税金によって支えられていると知った。税金は、普段の生活の中で「税金がどこに使われているか」が見えにくいため、「使われていない」のではなく、「気づいていなかった」だけなのだわかった。

その夜、私は夕食のときに思い切って口を開いた。

「たしかに税金って高いかもしれないけれど、みんなが病院に行けるのも、学校のものとかも税金でまかなわれてるんだって。」

母は少し黙ってから、「まあ、そうかもね。無駄にされるのは困るけど。」とつぶやいた。

私はその言葉を聞いて安心した。税金が高いと感じるのは、多く

の人が同じだと思う。でも同時に、それによって守られている暮らしがあることも、忘れてはいけない。もし税金がなかったら、道を整備する人もいないし、病院や学校の運営も難しくなる。自分たちが安心して暮らせているのは、目に見えないところで税金が働いているからだ。

税金は、ただ「取られるお金」ではない。社会の中で巡り巡って、医療や教育、道路など、私たち一人ひとりの暮らしを支える力になっている。これからは私は大人になり、働いてお金を稼ぎ、その一部を税金として納めることになる。そうしたとき、きっとこの日の母のひと言や、家族の会話、そして自分が気づいた税金の本当の役割を思い出すはずだ。その思い出があれば、納める税金に対して「自分のためだけでなく、みんなのために役立っている」と感じられると思う。そう考えると、税金を負担に感じるだけでなく、社会の一員として責任を持つ大切なことだと実感できると思う。

文句から始まった小さな家族の会話が、私にとっては大きな学びになった。税金について考えることは、ただお金のことを考えるだけでなく、自分が社会の一員としてどう関わっていくかを考えることでもあると知った。

私はまだ学生で、税金を納める立場ではないけれど、社会の中で税金がどんなふうに使われているのかを知ること、世の中を見る目が変わってきた。これから身の回りの出来事をよく見て、税金がどのように生かされているのかに目を向けていきたいと思う。そうすることで、社会への理解も少しずつ深まっていくと思う。日々そう感じている。